

清個数も LADG の D2 郭清例が少数 (25 % vs 58 %) であるものの, ODG の D2 郭清例と比較して差を認めず, 郭清リンパ節合計個数でも両群間に差がなかった. LADG 群の 265 例中, 進行癌は 41 例 (T2N0 : 23 例, T2N1 : 10 例, T2N2 : 5 例, T3N0 : 2 例, T3N2 : 1 例) であり, リンパ節転移例は 27 例 (T1N1 : 7 例, T2N1 : 10 例, T1N2 : 4 例, T2N2 : 5 例, T3N2 : 1 例) であった (両者の重複を含む). これらのうち再発例は 3 例 (T1N2 : 肝転移 (15 ヶ月), T1N2 : # 16 転移 (19 ヶ月), T2N2 : # 16 転移 (10 ヶ月) であった. LADG 群と ODG 群の再発率を比較した場合, 進行癌では LADG 群 vs ODG 群 = 1/41 (2.4 %) vs 5/63 (7.6 %), リンパ節転移陽性例では LADG 群 vs ODG 群 = 3/27 (11.1 %) vs 5/41 (12.1 %) であり, ともに両群間に差を認めなかった.

【結語】術前診断 T1N0 胃癌に対しての LADG は 1, 2 群のリンパ節郭清個数, 再発率の点では ODG とほぼ同等の手術と考えられる. また, pN1 症例に対しては観察期間が短期であるが再発例は無く LADG の適応と考えられる. 一方, 再発例はすべて pN2 症例であることより, pN2 症例は LADG の適応外と考えられた. T 因子に関しては腹腔鏡下の操作による腹膜播種の可能性の少ない T2 までが妥当と考えられる. 以上より, 現段階では T2N1 までが LADG の適応であると示唆された.

9 胃癌 ESD 周術期の危険因子の検討

古川 浩一・米山 靖・濱 勇
河久 順志・横尾 健・相場 恒男
和栗 暢生・杉村 一仁・五十嵐健太郎
月岡 恵

新潟市民病院消化器科

【背景と目的】高齢化社会への移行を背景に循環器, 脳血管, 血栓性血管疾患領域において急速に抗血栓療法対象者の増加がみられる. 一方, 低侵襲的内視鏡治療として ESD は広く認知され普及している. これらの背景をふまえ抗血栓療法な

らびに後期高齢者と ESD の周術期管理の関係につき検討する.

【対象と方法】対象は 2003 年 12 月より, 2008 年 9 月まで当科にて根治治療を目的とし胃癌, 胃腺腫にて ESD を施行した 384 例.

①術後出血の因子として抗血栓療法, Asp の関与とヘパリン化による対応ならびに患者側の因子, 術者因子, 処置因子を検討対象として集計. 多変量解析にて有意な後出血関連因子を抽出し, オッズ比を算出する.

②75 歳未満 A 群 264 例, 75 歳以上 B 群 140 例での合併症に関する危険に因子を多変量解析にて推察し, 特性をふまえた ESD 周術期管理を検討する.

【結果と結論】

- ①抗血栓療法に対する日本内視鏡学会ガイドラインに準拠することで血栓症イベントを予防し, より安全に胃癌患の ESD を遂行することが可能であった.
- ②ワルファリン非使用抗血小板療法例においてもリスクに応じたヘパリン化等の血栓予防を講じた対応が望ましいと考えられた.
- ③ESD 自体は後期高齢者においても低侵襲治療として実施可能と考えられた.
- ④周術期合併症としては術者の力量や経験が術中合併症や穿孔に反映されやすい.
- ⑤透析や切除範囲など潰瘍の創傷治癒の遅延を考慮した対応でさらにリスクの低減がなされる可能性が示唆された.

10 胃 ESD 症例からみた同時多発胃癌のまとめ

原田 学・入月 聡・河内 邦裕
大山 慎一・山川 良一・味岡 洋一*
下越病院消化器科
新潟大学大学院医歯学総合研究科
分子・診断病理学分野*

症例は 66 歳男性. 2007 年 9 月下旬, 健診の上部消化管内視鏡検査にて胃体中部後壁に 15mm の発赤陥凹と 3mm の発赤陥凹が認められ, 生検にて高分化型腺癌と診断された. 同年 12 月中旬